

いまを語りあう

絵本作家 **浜田桂子**さん

はまだ けいこ / 1947年、埼玉県川口市生まれ。桑沢デザイン研究所卒業。田中一光デザイン室勤務の後、子どもの本の仕事を始める。絵本に『あやちゃんのうまれたひ』（福音館書店）、『へいわって どんなんこと?』（童心社）『はい』『いいえ』ほうこく』（理論社）他多数



最終回 手は心の深い思いを伝える

「手」を再発見する

最後に、「手」をテーマにした絵本『てとてとて』のことをお話しさせてもらおうと思います。

手は楽器、手で話す、手で読む、手のもつ多様な世界を描いた絵本です。私は、手ってすごく不思議だなと思うって思っていました。何かを持ったリ、道具としての手だけではない。言葉が出なくても背中をさすってあげたり手をにぎってあげたりすることで、慰められたり心が癒されたりすることがあると思うんです。そんなふうに手には何かすごい力があるのではないかと感じていました。

そんなことが絵本にならないかと下書き本をつくったのですが、あたりまえすぎて子どもがわくわくしながら読めるようなものにはつながっていきませんでした。でも、あるところから、道具としての手、手を使って遊んだり手をたたいて音楽に

したりと表現の手、心を伝える（たとえば「大丈夫だよ」とか気持ちを感じに伝える）手：というように、同じ手でもいろいろな役割があるんだね、としていけば平面的ではない絵本ができるのではないかと思うようになりました。

それからまた下書き本を作りなおしました。そして最後にじやあ手っていったいなんなんだらうと考えた時に、手は心が出たり入ったりするってもすごいものなんだよと伝えたかった。背中をさすったり手をにぎったりすることで、言葉にはできなくてもあなたのことを思っていますよ、そばにいますよということ伝えていけるのではないかと思えます。自分の心の深いところの思いが手から発信されていくように感じられてならないんです。

ピアノストや外科医の手もすごいけど、そうではなくて、私たちがもっているこの手もすばらしいんだよ、「手」というもの

のを再発見しようとまとめた下書き本を編集者さんに渡し、絵本になっていきました。

被災地で読まれた

また、この本は私自身が助けられた本でもあります。

2011年の東日本大震災の時、被災地に絵本を送ったりチャリティー展にとりくんたりしました。津波で家族が流されました。そんな子どもたちもいたわけで、そんな子どもたちに対してどんな絵本を作っていたらいいんだろうと考え込んでしまいました。そんな時にNHKの「つながるラジオ」から、被災地の避難所でこの絵本を読ませてほしいと連絡をいただきました。この絵本は被災した人たちを絶対に励ますからと言っていただき、お役に立てるのならと快諾しました。

放送当日、3人のアナウンサーの方が実演を交えながらかなり時間をかけて一冊を読んでもくれました。そして終了後、放送

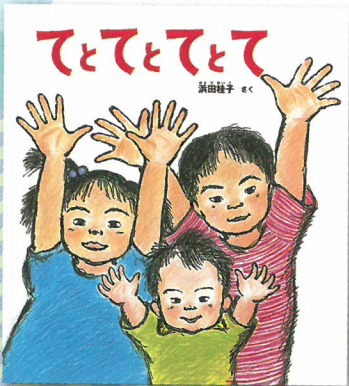
局の方がこの本に出会ってよかった、放送できてよかったとおっしゃってくださいました。自分がずっと考えて作ったものがそんなふうには被災地の人たちに向けて読まれて、好評だったと言ってもらえたことで、今まで通り絵本を作っていけばいいんだと自分を励ますきっかけを与えてもらいました。

*

日々ガザやウクライナの様子を見ていると、白昼堂々と、世界中の人が見ているなかで子どもが殺されていく。こんなことがどうして許されるのか、今まで人類が培ってきたものが根底から崩されている危機感があります。

そんな現実があるからこそ、小さな子どもたちには信頼や希望を届けたい。生きるよるこびにあふれた、何度も見たくなくなるような絵本を作っていきたい。そう考えています。半年間、ありがとうございました。

（おわり）



てとてとてとて
福音館書店

手拍子をすれば手は楽器となり、身ぶり手ぶりは手話となって手をもって話すことができるし、点字をとおして手で読むことができる手。手で遊ぶ世界から、手もっている心の世界までを楽しく描いた科学絵本。